研究ノート

台湾接収時における日本軍嚮導者についての一考察
――辜顕栄台頭の原点を再考する――

義家　文春

はじめに
第 1 節　史料からみる辜顕栄
第 2 節　辜顕栄口述の検証――台北から基隆まで
第 3 節　「伝説」の始まり――誰が近衛師団を台北城まで嚮導したのか？
おわりに

（要約）
本稿では辜顕栄（1866 ～ 1937）台頭の原点とも言える日本軍との邂逅（1895 年 6 月 4 日～ 7 日）に着目し、通説とされてきた辜の基隆～台北間における近衛師団の嚮導について再検証を試みた。台北への「嚮導」については自身が述べているように「間諜の疑い」を総督府首脳部から持たれていたということ、そして近衛師団も突然現れた辜やダビットソンらに対して「戦場」における相応の警戒をしていた。
第 1 節では辜の来歴や、基隆訪問に至った経緯を検証する。第 2 節では『台湾日日新報』に掲載された「始政記念四十年間の台湾」における辜の口述を中心に、台北から基隆までの動向を再検証していく。第 3 節では、台北「嚮導」という言説について史料比較を通じて再検証し、「間諜の疑いがあった」という視点から、嚮導役とは異なる状況にあったと検証しつつ、この評価の違いには統治機構による脚色があったと指摘した。

はじめに

日本統治期の台湾において、辜顕栄は政治、経済面において影響力のある存在であった[1]。辜への言及は台湾史における日本統治期の先行研究において散見される[2]ものの、辜自身に焦点を当てた研究は少なく、また、その場合でも往々にして『辜顕栄翁伝』（以下辜伝）から引用がなされている。『辜伝』には辜の「光輝ある一生を記念する為め伝記編纂」[3]したと記述されている通り、実態と比べると再検証が必要であろう内容が含まれている。しかしながら、辜に関するまとまった史料が少ないことから、辜研究の必読史料となっていることは否めない。従来の先行研究では『辜伝』からの引用が多く、辜の台湾史への登場は「日本軍を基隆に迎えに行った」という結果のみが簡単に触れられる程度である。しかし、こうした記述からは清朝期に無名であった辜が、なぜ無数の台湾人の中から「基隆の日本軍へ嘆願に行く」という役目を担う事になるのか、そしてなぜ日本統治初期に紳商として急速に台頭することが出来たのか、といった 2 つの根本的な疑問に答えることは出来ない。

本稿は、辜顕栄という代表的な「御用紳士」の始期に着目した。後世に、嘆願者から日本軍を台北まで「嚮導」した功労者という脚色された実態を明らかにするものである。こうした検証は、筆者が研究対象としている台湾における対日協力者の形成過程において、統治機構に接近することで権威化させられていく台湾人たちの実像を捉え直す作業に位置づけられる。

辜が歴史の表舞台に登場するのは日本による台湾接収開始とほぼ同時期の 1895 年 6 月からで

ある。詳細は第2節で述べるが、陥落直後の基隆へ近衛師団の早期台北入城を促すために、総督府首脳への面会を求めて現れたことが始まりである。それ以降近衛師団に従い、台北から雲林、嘉義へ向かう南進軍に従軍して功を挙げ、翌年1月には勲六等を授与[4]された。その後も植民地台湾の統治機構として誕生した台湾総督府の行政に積極的に協力し、1896年から99年にかけて台湾島内での治安確保に貢献していく。この期間に辜は無名の人物から台頭し、1897年4月には総督府より紳章を授与され、日本統治への改隷から僅か数年間で台北の富商である「李春生と相並びて新領土の2勢力を為す」[5]存在とまで評されるようになった。

辜は明治期から大正期にかけて台湾土着資本家、実業家としてさらに急成長し、1914年までに14社もの会社を起業、経営している[6]。その背景には辜が統治権力側から各種専売、認可事業への参入を認められたことが大きい。こうした専売事業を中心に1代で財を築き、「台湾五大財閥」の一角と称されるようになった。

また、辜は台湾経済界の重鎮となるだけでなく、その資望と人脈を背景として、植民地政治にも深く関わっている。まだ一般の台湾人に政治参加が認められていない明治から大正期にかけて、台中庁参事（1909年）、台湾総督府評議会員（1921年）を歴任し、植民地政治に参与しており、昭和には台湾人初の貴族院議員（1934年）として勅選されている[7]。大正、昭和両天皇の即位式である御大典には台湾代表として招待されるなど、日本側からは常に植民地台湾人の代表格として遇されていた。1937年の病没後には従五位を追賜されるなど、辜はこうした日本当局との繋がりの深さから、戦後の台湾では一般的に「御用紳士」、「漢奸」という評価[8]を受けている人物である。

第1節　史料からみる辜顕栄

1. 辜顕栄についての主な史料及び先行研究

辜の年少期から青年期までの足取りは史料が非常に乏しく、どのような活動をしていたのかは判然としない。管見の限りではこの時期の辜に言及している代表的な史料は以下の3点である。まず、領台前後の辜の人物、行動を詳細に扱っている史料として、1896年6月19日より台北で発行が始まった①『台湾新報』の記事「辜顕栄の性行閲歴」[9]と、それを下敷きにして、1920年に出版された『怪魔辜顕栄』[10]、『台湾裏面史』[11]が挙げられる。

次に、台湾総督府民政局文書課が辜の叙勲申請に際して、台湾事務局総裁（伊藤博文）に申請資料として送付した②「李春生及辜顕栄叙勲ニ関スル件」[12]にも日本の領台前後における辜の経歴、動向が記されている。そして、辜の死後に出版された伝記である③「辜伝」が挙げられる。

2. 青年期の辜顕栄

まず、③によれば辜顕栄は1866年2月2日台湾中部の港湾都市鹿港に生まれた。少年時代より「その元気の盛んなること毎に郷党に舌を巻かしむる」存在であり、「8歳より20歳までは郷里において清朝の進士黄玉書氏に師事して漢学を修めた。頭脳明晰加ふるに好学心に富み、常に

抜群の成績を示したことは恩師を驚嘆せしめた」とされる[13]。

しかし①では1898年2月2日付紙面より、北強生と称する人物による投稿連載という形で辜顕栄に対するネガティブキャンペーンが実施されるが、その一連の記事の中で、鹿港時代の辜について、「群を博徒に結び銭を強談に貪り喧嘩詐欺の題事に自ら天地を窄め閭里郷党に弾爪せらるるに及んで故郷の空にも住み難く遂に妻子を棄ててこの台北に来り艋舺にゴロツキ大稲埕に流浪し苦力轎夫の仲間に混して日一日を過しぬ素より悪事に抜け目無き暴漢」と紹介している[14]。

台北に移ってからの辜については史料②③に言及がある。まず③では「明治24年、26歳のとき鹿港街陳氏笑を迎へて妻となし・・・・・・この頃より翁は台北に住家を構へ、石炭輸出の為め、香港、上海等を往来した」、「日清戦役の勃発前上海方面に滞在せる翁は、南洋大臣張之洞に接触し、石炭供給の契約を結びたるも・・・・・・明治28年5月遂に上海を引揚げて帰台し、基隆に皇軍を迎ふることになった」[15]とある。

また、②では「19歳の時に上海南京漢口香港に赴き、嘉成、嘉益の二社を設立し糖業を営んでいた」「28歳の時に上海寧波基隆間で石炭の事業を行った」と、より具体的な記述がなされており、③に近いことが分かる。

しかし、辜の伝記編纂に際して手記を③に寄せた元基隆区長の許梓桑[16]は、「翁を知つたのは領台数年前、明治24、5年のことで、当時翁は、砂糖、豆、黄麻類を戎克船に積んで、鹿港、基隆間を往復して商売して居った・・・・・・私が漢学修行中『古文精言』といふ本の表紙を書くときに『俺れの方が余つ程上手だ』と言つて8冊全部の表紙を書いて貰った」[17]と辜とのエピソードを紹介している。

この証言は辜が台北に居を構えた時期が明治24年であるとしている③と一致している。「上海、香港等へ石炭輸出に往来」と「砂糖、豆、黄麻類を戎克船に積んで、鹿港、基隆間を往復」とその内容に大きな差があるものの、船を使用した何らかの貿易に従事していたことがわかる。

辜について詳述している文献ではないが、この時期の辜について元台湾総督府嘱託職員であった井出季和太が書いた『興味の台湾史』では「当時辜顕栄の口述に依れば、本人は、艋甲（ママ）の雑貨商人で屋号を瑞昌成と称し」[18]とある。この記述を裏付けるものとして、伊能嘉矩が「台湾総督府公文類纂」（明治28年官房乙種永久保存第2巻、他）の中から抜粋手抄したと考えられる「台湾領有に関スル資料」[19]が挙げられる。その中には「台北ノ商人辜顕栄ノ口述」[20]が収録されており、当時辜顕栄が総督府首脳に手渡したとされる嘆願書や口述した内容が16条にまとめて記録されている。冒頭には、「本人ハ艋舺ノ雑貨商ニシテ屋号ヲ瑞昌成ト称シ姓名ハ辜顕栄トイヒ元彰化県鹿港ノモノナリ」と明記されている。これは辜口述の裏付けが確認できる貴重な記述である。

上記の様に辜の台北での動向については、各史料で記述に差が見られるが、しかし辜が台北艋舺で「瑞昌成」という雑貨商を営み、何らかの貿易で生計を立てていたことは読み取れる。こうした「台北艋舺の商人」としての存在が次節で検討する辜と近衛師団との邂逅に連関してくるのである。

第 2 節　辜顕栄口述の検証――台北から基隆まで

1. 辜顕栄の口述

本節では辜が日本と邂逅したとされる時期（1895 年 6 月 4 日～ 7 日）の、辜の動向について検証する。辜が「漢奸」[21] と評価される原因の一つに、台湾人として最初に異民族の支配者である日本軍を台北まで嚮導した「民族的裏切り者」という印象がある。

この疑問点は辜が改隷後の台湾で台頭していく過程の原点であるばかりか、現在においても辜が言及される際に最もよく触れられる部分である[22]。それだけに、嚮導の有無については辜研究においては重要な点であるため、ここに焦点を当てていく。本節では総督府首脳部の基隆上陸前後から台北へ近衛師団先鋒隊が入城するまでの過程を、1935 年の台湾施政 40 周年記念企画として『台湾日日新報』（以下台日）に掲載された A. 辜自身の口述「始政記念 40 年間の台湾」（1）（以下『辜口述』）を基に、B.『近衛歩兵第 2 連隊歴史附録』（以下連隊史）、C.「台湾総督府陸軍幕僚歴史草案」（以下幕僚史）[23]、D.「台湾領有に関スル資料」（以下台湾資料）[24]、E.『*The Island of Formosa, Past and Present*』（以下 *The Island of Formosa*）[25]、などを用いて検証を加えていく。

まず、近衛師団は 6 月 3 日に基隆を占領するものの、陸上（師団司令部）と海上（樺山総督らが座上する横浜丸）間での連絡不通[26]、市内の掃討戦や湾内に敷設された機雷の除去作業などが発生したため、総督府首脳は 5 日午後 2 時に基隆沖に到着。入港したのは午後 4 時半であり、翌 6 日午後 1 時に上陸し仮総督府を旧税関跡に開設した[27]。そして、辜は総督府首脳部が基隆港に入港してから 6 日に上陸するまでの間に、首脳部が座乗する横浜丸に「憲兵に案内されて」訪れるのである。この時の様子を辜は A でこう語っている。

> ちょうど明治 28 年五月二十八日（原文ママ）前の晩に土匪どもが台北城内始め艋舺或は大稲埕方面の所々に蜂起しまして略奪をほしいままに致しましたので、市民が大変恐慌を起こし非常に心配しました、この 3 市街の紳士連が集まりまして、色々と善後策を講じましたところが、どうも名案が考へ出なかった、大変心配して居りましたがここに私が参りまして『皆さんはこの問題に就いては心配しなくとも必ず私がこの難を救ってあげませう』とその時の有力者の方々に申述べ、その翌朝早く午前 3 時頃に私は、洋傘を 1 本携へまして基隆に向って進んで参りました所が御存知ないかも知れませんがその時の沿道の途中の警戒は非常にきびしかったのです、私が今の汐止街その時は水返脚と申しましたが、ここの前哨隊長でありました松川敏胤という方に面会を求めて、只今から基隆に行きますといふ事を申出で、その時は通行許可証がなければ通行させない事になっておりましたから、松川さんに通行証を貰い受けて基隆の方にだんだん進んで来ました、基隆の方に参ってその時の通訳であった呉という人に面会し、自分の来意を告げて憲兵隊の方に行き、そこで 2 名の憲兵を付けて下さいまして横浜丸に行きましたのであります。その時水野さん（民政局長）が真中の丸い卓子を囲んでいらっしゃってその両脇にはいわゆる参謀とか軍部の幹部が大勢おいでになってその中に木下新三郎さん（後の台日主筆）もおいでになりました。私は簡単な嘆願書を携へて行きました

から略自分の来意もその中に書いてありました。それには要するに「台北においては今土匪が盛んに略奪しておりますからどうしても軍隊を派遣されなければ到底土匪を平げる訳には行かぬから1時間でも早く軍隊を派遣されたい」簡略に認めてありましたが、その席に在った方々の意見は中々一致しなかった。或る人は自分を指して劉匪首の間諜であるとか或は土匪の頭であるとか、この人は悪い人であるとか、甲論乙駁中々一致しなかったのであります。私はそれを漢話の通訳から聞きますとたちまち涙が出ました。‥‥‥その内に水野閣下はお起ちになって『諸君の議論は各々一理あるが私の見る所に依るとこの人は義民である。義侠心に富んだ人で決して悪い人とは見られない』と申されて直に2人の通訳と別室に行かれました。多分樺山総督閣下のお部屋に行かれたに違いないと思はれましたが、間もなく出て来られ、直ぐに命令を下さいました。そして2人の通訳、1人は英語の佐野雄三郎さん、1人は北京語通訳の小川甚五郎さんという人を遣されまして、私と共に水返脚迄参り、前哨隊の松川さんにいい付けられ直ちに台北に向かって進軍致されたのでありますが、翌朝3時頃にちょうど台北城の東門の附近に進軍したのであります。その時の松川さんのお考へでは直に入城したいという事であったが私は「もし直ちに入城されたならば必ずやお互いの衝突が起るに違ひない、もし御入城なさるならば夜明けを待つてから御入城なさったらよろしい」と申し上げて、佐野さんから告示を貰い受けて城内なり大稲埕なり万華方面に参りましてその告示を一々貼り付けてよく其の理由を説いて聞かせ、皆よく了解し、遂に我皇軍は始めて台北城に入城した訳であります[28]

この回顧談は辜自身が語っているだけに、『辜伝』でもこの証言の抄録を記載している[29]。そのため同文献を引用する多くの先行研究においても、辜の来歴を紹介する際には、同様の引用がなされている。それだけに『台日』に掲載された辜の回顧談は重要な意味を持つため、他史料と照合・分析しつつ、詳細に事実確認を進めていく必要がある。

この証言の中で重要なのは次の5点である。①「6月4日夜に台北城内外で土匪が蜂起し、市民が恐慌を起こした」、②「3市街（台北、艋舺、大稲埕）の紳士連が集まって善後策を協議したがまとまらなかった」、③「翌午前3時頃（5日）に基隆へ向かった」、④「水返脚で前哨隊長の松川敏胤に面会を求めた」、⑤「間諜或は土匪の頭であるとか、甲論乙駁中々一致しなかった」、特に⑤については辜が本当に近衛師団を台北まで嚮導したのか、という本稿の核心部分に直結する内容のため、次節で詳しく取り上げる。

まず①の状況とはどうであったのか。当時、台北（大稲埕）に滞在していたニューヨーク・ヘラルド紙の戦地特派員ダビットソンの著書『*The Island of Formosa, Past and Present*』には以下の様に記されている。

「3日午後、基隆陥落の報せが台北に届き始める。しかし民主国の官員は敗戦を否定しなかった。夕方になると多くの負傷兵が大稲埕に集まりだし、漢方医の診療所前に安置されていたが、漢方医は簡単な治療を施すだけであった。‥‥‥翌日6月4日、現場は相当混乱が起こり始め、多くの官員の家族、眷族が淡水河を下って行った。夕方になると唐巡撫や陳季同将軍が民主国を捨てて大陸へ去るのではないかという噂が流れ始めた。多くの人々は官員が

逃げ出す状況を目の当たりにして、この噂は真実なのだと確信していた。……6 月 5 日午前 2 時、情報が急速に広まると、大勢の兵士が銀を受け取るために府衙へ殺到したが、既に唐巡撫が不在だと知ると、府衙へ火を放ち、木造の大建築が一瞬にして火の海に包まれ、その立ち昇る火炎は数キロ離れた所からも見る事が出来た。この炎は平和と秩序の終わりを告げていた。間も無くして暴徒の叫び声や襲われた人々の悲鳴が、鋭い銃声の音と共に響き渡り、辺りは恐怖に包まれた。……6 日正午、発砲は連夜続けて起こり、特に艋舺郊外の被害は酷かった。婦女は惨殺され、男性の犠牲者も数え切れず、淡水河は多くの溺死体で埋まっていた …… 治安はますます酷くなる一方で、漢族富商たちは日本軍に速やかに台北接収を要請し、「土匪」を追い払って、この虐殺略奪をやめさせる準備を協議したが、要請状に署名した場合、万が一清国が台湾を回復した際に、自分たちは漢奸、国賊として斬首されることを恐れていた」[30]

この二人の証言を対比してみると当時の台北城内外の様子について辜は 4 日夜から「土匪」が蜂起、と記憶し、ダビットソンは 5 日の午前 2 時より府衙を中心に蜂起が起こったとしている。多少の時間の差はあるが、両者の記憶に大きな食い違いは無い。

ちなみに近衛師団の戦闘記録にも「(6 月 3 日）コノ日午後近衛師団ハ北斗及基隆ノ敵塁ヲ攻撃シ午後 5 時全ク占領セリ」[31] とあり、従軍した元兵士の回顧録でも「この戦おおよそ午後 2 時に始まり 6 時に終る」[32] と記述されている。ダビットソンの記述する「3 日午後、基隆陥落の報せが台北に届く」、「夕方より負傷兵が大稲埕に集まりだした」とは若干の時間差はあるものの、概ね一致している。辜の証言は 1935 年であり、ダビットソンの記述は 1903 年である。それでも、かなりの部分で一致点が認められる。さらに近衛師団の記録からも基隆陥落が 3 日であることが証明されており、それに伴って民主国首脳の唐巡撫が逃走し、台北における「台湾民主国」は崩壊した。無秩序となった台北城内で「土匪」が略奪行為に走り、市民が恐慌を起こした、という当時の様子の証言は信憑性が高いと言えよう。

2. 台北から基隆までの動き

次に①に関連する③を確認する。辜は「(5 日）午前 3 時頃」「誰にも無断で」台北から基隆に向かったと証言している。つまり辜は基隆からの敗残兵や唐巡撫の逃亡の噂、それを原因に発生した「土匪」の略奪行為等を横目で見ながら、台北を出発したことになる。ダビットソンや後述するハンセンは台北から基隆までの距離を約 20 キロと記しているので[33]、この時刻に台北から向かえば、辜が 5 日午後に基隆へ到着することは十分可能である[34]。

また辜が証言の中で言及している水野民政局長こと水野遵は 1897 年 3 月に台湾全島を巡視した際に記した日記の中で、当時の辜の来訪について以下の様に記述している。

一昨年台湾総督府員ノ一行基隆ニ著スルヤ時ニ辜君顕栄アリ単身来リ迎ヘ強ヒテ進謁ヲ求ム当時同僚多クハ君ヲ以テ偵探ト為シ相見ルコトヲ肯ンセサリキ余独リソレ偵探タルト否ヤトヲ問ハスシテ先ツ進謁ヲ許シシカル後ニ決スル所アラント欲セリヨツテ群議ヲ排シ始メテ君

ヲ見タリ[35]

水野の日記には「単身来リ」、「偵探ト為シ」とあり、「自分を指して劉匪首の間諜であるとか或いは土匪の頭であるとか」という疑いを持たれたとする部分も日記の内容と符合する。また、初代台湾総督の樺山資紀が6月7日に伊藤博文へ宛てた情勢報告の中にも以下の記載が有る。

横浜丸翌5日ヲ以テ三貂湾ヲ抜錨シ基隆港ニ入リ・・・・・・台北ノ商賈1人来ル由テ之ニ尋問シタルニ台北府駐在文武官ハ皆既ニ逃走シテ1兵卒ナキヲ幸イトシ近傍ノ土匪蜂起シテ巡撫ノ官衙ヲ焼却シ略奪ヲタクマシフスルヲ以テ速ニ我兵ノ来リ鎮圧センコトヲ請ヘルナリ[36]

この報告から樺山ら総督府首脳が基隆に到着したのは「5日」であり、「台北ノ商賈1人来ル」とは辜を指すと考えて間違いないだろう。これらの史料を比較すると、辜の証言のうち③についても事実であると実証できる。

次に②の「紳士連の善後策協議がまとまらなかった」という辜の証言はどうであろうか。ここでいう紳士連とは辜の証言に「3市街の」と前置きが有るので、それは台北城内外の構成からして台北、艋舺、大稲埕の有力者を指すと推測できる。ではどのような人物が紳士連であったのであろうか。

近衛師団は台北を接収し、総督府を台北に開設した後も、城内外に潜伏している「便衣化」した「土匪」＝敗残兵を見つける事に苦慮している。捜索途上において無実の台北市民を害する事案も多発したため、そうした誤解による被害を避けるために、紳士連によって1895年7月に「保良局」の設置が台湾総督府へ建議されるのである。

この案を建議した紳士から数名を挙げると、大稲埕李春生、葉為圭、陳滄浪、艋舺街の李秉鈞、陳洛、他14名が名を連ねており、そのうち5名[37]を除く全員が台湾総督府の編纂した『台湾列紳伝』に記載がある。辜の語る紳士連が彼らに該当するかは特定する術が無いが、近衛師団の台北接収から約1ヶ月後に、台北の有力者たちが治匪策として保良局を建議している事実を踏まえると、接収前の6月4日夜から発生した騒擾に対しても、同様の人々が対応に動いたと考えても違和感はない[38]。仮にそうであれば、ダビットソンの「漢族富商たちは日本軍に速やかに台北接収を要請し、「土匪」を追い払って、この虐殺略奪をやめさせる準備を協議した」という記述にある紳士連については推測が可能となる。

それはダビットソンと李春生の関係にも起因する。李は長年、英商和記洋行と同宝順洋行の買弁を務めた関係上、英語話者である。そして茶商として台北屈指の豪商であり、保良局建議の代表者であるとともに、保良局発足後は会弁に就任している。つまり台北紳士連の中でも最有力者に近い存在と言えるだろう。そして、ダビットソンの中国語名は複数確認されているものの[39]、「禮密臣」という漢字名を付けたのは李春生という[40]。さらに李が1896年に勲六等に叙勲され、日本へ63日間滞在した際には、ダビットソンは李の孫たちと共に日本へ同行しているほど、両名は親しい存在であった。

そうした経緯から大稲埕に洋行を構えていた外国商人たちや、ダビットソンが3市街の漢人有力者が集まり、協議している場に同席していた、またはその内容を李から伝え聞いていたとしてもおかしくはない。だからこそ「要請状に署名した場合、万が一清国が台湾を回復した際に、自分たちは漢奸、国賊として斬首されることを恐れていた」という様子を記述できたわけである。

上記から②の「紳士連の善後策協議がまとまらなかった」という辜の証言の理由が、ダビットソンが記述した「漢奸として処罰されることを恐れた」という事とすれば合点がいく。③とも関連するが、つまり紳士連の協議が「まとまらなかった」からこそ、その役が艋舺の雑貨商であった辜に回って来たものと考えられる。また、台湾経世新報「北白川宮」第71回では李春生が推薦した、という具体的な記述もある[41]。ダビットソンの証言では「特に艋舺郊外は被害が酷かった」とあり、該地の商人である辜からすれば現況に対する焦慮の念や、自身の気性もあってか、単身で異民族である日本軍のもとへ赴く役に応じたとしてもおかしくはない。

第3節　「伝説」の始まり――誰が近衛師団を台北城まで嚮導したのか？

1. 台北「嚮導」説とその裏付け

前節までは辜が単身台北から基隆まで、治安回復のために近衛師団の早期台北入城を嘆願に赴いたことを「事実」として確認した。そこで、本節では「辜伝」で述べられているように基隆で総督府首脳部へ嘆願した後の辜の動向、つまり台北まで近衛師団を「嚮導」したのか、という検証を行っていく。

また、検証を行うに際し「嚮導」の定義を明確にしておく。『広辞苑』によれば「嚮導」とは「先に立って導くこと」、「（軍隊用語）部隊が横隊に編成されている場合、その両翼に配置して整頓・行進などの基準とする者」とある。基隆～台北間は「戦場」であったと捉えるならば、この場合、後者の意味がより適当であろう。そのため、本稿では「軍の行進の基準となる存在」と定義したい[42]。

辜は「通訳の佐野雄三郎、小川甚五郎と共に水返脚へ向かった」と述べている[43]。この部分について『幕僚史』では「命により、松川参謀、大塚少佐を水返脚へ派遣せり」とあり、辜が同行していたと口述している小川辰五郎[44]も1935年に刊行された『台湾四十年回顧』の中で以下の証言を行っている。

> 「・・・・・・越て6月5日基隆に上陸し、夕刻命により松川大尉（敏胤）に跟随し台北に向ふ、大尉は騎馬なるも騎せられずして馬卒に牽引せしめらる、途上水返脚（今の汐止）において近衛1大隊の2中隊に合す、偶在北の外人並に辜顕栄等の嚮導にて台北に向ふ、途上銃声を聞く頻なり辜氏は余を通じて隊にラッパの吹奏方を建言せられたるも止む」[45]

小川は近衛師団第1連隊付陸軍通訳として日清戦争に従軍し、近衛師団と共に台湾へ向かった。近衛師団の澳底上陸後は総督府首脳部が座乗する横浜丸に乗船しており[46]、辜が横浜丸に現れた

際には同乗しているため、上述の内容は辜の基隆訪問から台北入城にかけての口述を裏付ける重要な証言と言えよう。これらをそのまま読めば、基隆上陸を5日としている部分や、基隆から水返脚までの道中について、辜の口述では松川が、小川の証言では辜の存在が確認出来ないなどの不自然さは残るものの、水返脚で近衛師団と合流したことや、外国人（ダビットソン）への言及も併せて考えれば、『幕僚史』の記述とほぼ一致していると言えよう。

また、『近衛歩兵第1連隊歴史』には「同6日連隊本部及第2大隊（第7第8中隊欠く）水返脚に向ふ」とあり、この近衛第1連隊に総督府から参謀の松川と大塚、通訳の小川、そして辜が随行したと考えられる。前節で紹介した木下新三郎はこうも証言している。

> ・・・・・・所が甚だ大きな男でいわゆる容貌魁偉という訳で、どうも刺客ではなかつたかという説もあつたけれども・・・・・・だがそのままどうという訳に行かぬから、やはり捉へたまま近衛師団の方に回した、さうして兵隊は水返脚まで行くといふと、これも有名な話ですが亜米利加の新聞記者でデビットソン、それからホーレー、といつてこれは独逸人です、もう1人誰か来たが、3人が軍隊の前に来て、早く兵を進めて貰はぬと困る、今非常に困つて居るからという、それで辜顕栄君が言いたいと思う事を向うからいつて来て双方一致したから急に兵を進める事となつた[47]。

辜は総督府首脳部に対し台北の悲惨な状況を伝え、一刻も早い前進を要請したが「そのままどうという訳に行かぬから、やはり捉へたまま近衛師団の方に回」された事がわかる。それから「兵隊は水返脚まで行く」とも証言している。そして、水返脚では前節でも触れたようにダビットソンらの外人3名と邂逅し、6日の夜に台北へ向けて前進していくのである。前進した部隊については1895年11月にダビットソンを勲五等に推挙した台湾総督府から内閣総理大臣宛に申請された叙勲裁可書にはこう記されている。

> ・・・・・・大ニ敵情ヲツマビラカニスルノ便利ヲ得タルヲ以テ同連隊長陸軍歩兵大佐小島政利ハソノ夜2中隊ヲ第1大隊長陸軍歩兵少佐三木一に引率セシメ右デビソン及トムソン両名ヲ嚮導トシテ難ナク台北城ニ進入セリ・・・・・・[48]

次に、辜が1896年（明治29年）1月に勲六等に叙勲された際の叙勲裁可書には以下の様に書かれている。

> ・・・・・・我軍ノ台北城進撃ヲ促シ土民ノ保護ヲ哀願シ爾来軍隊ノ先導トナリテ沿道ノ人民ヲ説諭シ糧食ノ徴発宿舎ノ配備等ニ尽力シ台北城攻撃ニ当リ先鋒隊ニ従テ城内ニ入リ各戸ニ勧告シテ敬意ヲ表セシメ・・・・・・[49]。

こうした経過を以て辜は後々まで、「皇軍を基隆に迎え、台北へ嚮導した」人物として日本統

治期における本島人（台湾人）の「立志伝中の明星」[50]としての第一歩を踏み出すことになり、戦後は「日本軍を台北に導いた裏切り者」[51]として「漢奸」の評価が下されることになるのである。

2. 誰が嚮導役を担ったのか

これまで辜が近衛師団を「嚮導した」という通説に従って、総督府首脳と邂逅した6月5日～7日の台北入城までを検証して来た。確かに辜が近衛師団と共に動いていることは史料から確認出来るものの、しかしそのことと、辜が実際に近衛師団を「嚮導していた」ということが一致するわけではない。ここでは辜が実は「嚮導していなかったのではないか」という視点から6月5日～7日の状況を再検証していく。

辜が「嚮導していなかった」という部分を立証する上で重要なポイントが3つ挙げられる。それは、辜は信用されていなかったのではないか、という点と、辜が接触したのは総督府首脳部であって、軍事行動を直接担っている近衛師団司令部ではないこと、『連隊史』や『幕僚史』といった史料、ダビットソンや久留島武彦など、近衛師団の水返脚から台北入城までについての動きに触れている史料、証言では辜に一切触れていないこと、などである。

まず、辜は信用されていなかった、という点を検証していきたい。辜が総督府首脳部を横浜丸に訪ねた際、「その席に在った方々の意見は中々一致しなかった。或る人は自分を指して劉匪首の間諜であるとか或は土匪の頭であるとか、この人は悪い人であるとか、甲論乙駁中々一致しなかった」ため、「それを漢話の通訳から聞きますと忽ち涙が出ました」と述べている。その後、水野民政局長の鶴の一声で辜の陳情は聞き入れられた形となっているが、実際はどうであったのか。場所は占領直後の基隆であり、「戦場」と化した状況のなかで、言語が通じず、突然現れた「容貌魁偉」な台湾人を容易く信用することが出来るであろうか。

このときの様子を「その席に在った方々」の1人である木下新三郎は「どうも刺客ではなかつたかと云ふ説もあつた」としつつ、「だがそのままどうといふ訳に行かぬから、やはり捉へたまま近衛師団の方に回した」と述べている。つまり、間諜の疑いが完全に晴れた訳ではなく、辜の嘆願内容が正確であるかどうかを確認するために総督府から近衛師団に引き渡された、と見るのがこの状況下であれば妥当であろう。

その後、翌6日に近衛師団第1連隊本部と第1大隊の2中隊が基隆から水返脚へ前進となるが、辜口述における「北京語通訳の小川甚五郎」こと小川辰五郎は「夕刻命により松川（敏胤）大尉に跟随し台北へ向ふ」と述べていることも前述した。その後、近衛師団は暖々街からも前進してきた第2大隊と水返脚で合流し、『幕僚史』や『*The Island of Formosa*』にある記述と場面は進んでいく。ちなみにこの時、ダビットソンら一団を「流暢な英語で」誰何した歩哨であり、後に「我国童話界の第一人者」[52]と称された久留島は『台日』での回顧談で当時の様子をこのように語っている。

> ・・・・・・台北に進む途中宿営したのは例の水返脚で、まだ街には入らずに軍を止めたのだが、この水返脚こそ僕には終生忘るることの出来ない土地で・・・・・・午後3時半過ぎか4時近く

に及んだ頃だつたろうよ、僕は他の新兵君と交代とあって山頂に上り、歩哨の位置に立ったのだがね・・・・・・するとだね、遥か街道筋じゃない鉄道線路を伝って誰だか人らしいのが34人現れた・・・・・・外人は3人、白旗を先頭にして籐椅子代用の急造轎に乗り何れも夏の装束、我前哨線近くで轎を捨て歩哨に立った僕の前を過ぎようとした・・・・・・その申立に依るとこの外人は当時大稲埕に居住の者で、今回敗兵の乱暴で台北は秩序頽廃一日も早く鎮定の為めに日本軍の来城を嘆願に来たということだ、そこでとにかく規則通りぎりぎり回りをさせ、眼を隠して本部に送致した。・・・・・・[53]

この久留島の回顧談に登場する外人たちはダビットソン一行である。「街道筋ではなく鉄道線路を伝つて」の証言はダビットソンの記述とも一致する。そして「目隠しをして本部に送致した」など「戦地」にあって突然現れた彼らに対する警戒感も読み取ることが出来る。しかし、この久留島の回顧談の中にも「嚮導役」であった辜についての言及は見当たらない。この回顧談からは、突然現れたダビットソン一行も必ずしも近衛師団に全面的に信用されていたわけでは無いことがわかる。また、別途偵察隊を錫口へ派遣していることや、『近衛師団戦闘詳報』で「外人ノ云フ所一々信ス可ラズトスルモ台北府ヲ速カニ占領スルハ師団ノ企図ニシテ」[54]と記述されていることからも警戒対象であったことがわかる。また、この時点で近衛師団は偶然台北在住の通信技師ハンセンから台北城内の様子を無線で確認[55]しており、辜やダビットソンのもたらした情報だけを鵜呑みにして行動していたわけでは無い。この「戦場」にあって軍隊の警戒と情報統制は当然厳しいものであったろう。そうした状況から推測するに、ダビットソンらを聴取しつつ、食事を振舞いながらも、近衛師団は自軍が掴んでいた情報はダビットソンらに明かさなかったのではないか。この突然現れた外国人たちがもたらした情報と、既知の情報とに齟齬があるかを密かに確認していたのかもしれない。

本来であれば、ここで近衛師団を台北まで嚮導する役を担う辜とダビットソンの2人が邂逅してもおかしくないのだが、不思議なことに辜はダビットソンの存在を口述のなかで一切触れていない。また、ダビットソンも回顧録の中で辜の存在には全く言及していないのである。双方にとって水返脚での邂逅はインパクトの大きい出来事であったはずである。辜からすれば、ダビットソンらがもたらした情報は、自身にかけられている間諜の疑いを晴らす事になり、ダビットソンらから見れば、「漢奸」にされることを恐れていた紳士連とは別に、台湾人商人が既に近衛師団と行動を共にしていたことに驚いたであろう。しかしながら、両者に邂逅の場面の言及が一切ないことは、実は双方共にその存在を台北入城まで知らなかった、という推測が出来ないであろうか。その理由には、近衛師団の軍としての警戒があり、辜とダビットソンらをあえて水返脚で対面させなかったと考えられる。さらに、辜は台北への前進を命じたのは松川だと述べているが、近衛師団の指揮官は連隊長である小島正利大佐である。少佐である松川が大佐である小島を超えて軍令を発するとは考えにくい。このことは辜が松川以外の将校の名を知らなかった、つまり知り得る立場に居らず、水返脚まで同行しているものの、間諜の疑いが有るため、捕虜に近い扱いであったのかもしれない。軍との接点として松川がいるものの、それ以外は何も知らされていなかった

可能性が高い。そのことはダビットソンですら「目隠し」をして連隊本部に連行されているのだから、辜の扱いはそれと同等に近いものであっても不思議ではない。

その後、近衛師団は前述したダビットソンの叙勲裁可書に書かれている通り、「デビソン及トムソン両名ヲ嚮導トシテ」台北へ向かったとある。小川は「途上銃声を聞く頻なり辜氏は余を通じて隊にラッパの吹奏方を建言されたるも止む」と口述しており、辜も同行していた事がわかる。これも前述したが、辜の叙勲裁可書には「台北城攻撃ニ当リ先鋒隊ニ従テ城内ニ入リ」とある。ダビットソンらは「嚮導」、辜は「先鋒隊に従って」である。共に台北前進の際の功に触れているが、この表記の差は大きい。ちなみに辜の裁可書の「案」段階では、基隆～水返脚間について「松川陸軍歩兵少佐ニ従ヒ軍隊ノ先導トナリテ台北ニ入リ」[56] とある。しかし最終的には「松川陸軍歩兵少佐ニ従ヒ」が削除され、「台北ニ入リ」が「沿道ノ」に修正されている。そして、その後には前述した「台北城攻撃ニ当リ」に繋がっていき、この部分以降は案段階からの大きな変更は無い。

この記述の差は恐らく、ダビットソンと辜の役割の違いにあったと考えられる。近衛師団では「嚮導役」を部隊と直接邂逅したダビットソン一行であると認知しており、辜はあくまでも総督府が連行してきた「間諜の恐れがある参考人」程度に受け止め、差別化していた。辜の叙勲裁可書を見る限り、新竹以降の南進軍に従軍し、部隊の糧食調達や間諜、そしてようやく「嚮導」という記載が見られる[57]。つまり、辜の功績として評価された主要な部分は、新竹以南での行動に対するものが大きいのである。外敵である日本軍に対し、台湾人として最初に協力の姿勢を示したことに対する評価は、今後総督府が「新附民人の感化に至大の効果をもたらせる」[58] という台湾人懐柔策としての側面が強い。しかし、それだけの理由では数多く存在する台湾人有力者を差し置いて、辜のみを特別視し続けることは難しい。やはり、鹿港という辜の出身を考えるとき、最も実力を発揮した点は、地の利や、土地の人物を認知したうえでの治匪要員としての活動、兵站維持に尽力することが出来た南進軍での働きにおいてこそ、日本側に評価されたと考えることが自然であろう。

このように基隆から台北までの辜の動向を分析していくと、近衛師団の最前線に立ち、部隊を嚮導していたというよりも、間諜の疑いを持たれつつ、参考人程度に扱われていた可能性が高い。当時の台湾が「戦場」と化していた状況を考えれば、突然現れた台湾人を短時間で軍の嚮導役として信用するとは考え難く、水返脚においてダビットソン一行がもたらした情報や、偶然の出来事から得た技師ハンセンからの情報、そして近衛師団の偵察情報と辜が伝えていた内容が一致したため、徐々に信用されていったのであろう。しかしながら、台北入城に際しての嚮導役は、やはり第三者として信用のおけるダビットソンらであった。

以上の分析から、辜が台北まで近衛師団を「嚮導」したという事実を立証することは難しい。つまり、辜が「漢奸」とされる理由の一つである「日本軍を台北に導いた裏切り者」という指摘は当たらないことになる。

もう一つの重要な点は、間諜の疑いを持たれた「歎願者」であった辜が、そうした事実とは裏腹に「嚮導者」という伝説と化し流布していった、ということである。この伝説は、貢献を成し

た対日協力者の象徴的な場面として、統治機構に好まれ、脚色されていった可能性が高く、本稿で取り上げた『台日』の座談会はその証左とも言えよう。その思惑は、少数の日本人が支配層として君臨する改隷後の台湾社会において、台湾人協力者層の構築に利用できる美談としたいことであったと考えられるのである。

おわりに

本稿ではこれまで通説とされてきた辜顕栄による近衛師団の台北への嚮導について、史料の比較検証・分析を通じてその否定の仮説を提示した。検証において、辜の基隆訪問と台北嚮導は連関しつつも、前者での「成功」が必ずしも後者の役割を担う事には繋がらないという事を、当時の「戦地」化した状況を踏まえながら指摘した。

また、当時を知る日本人が少なからず参加している『台日』の座談会において、辜の来歴を否定する発言は見当たらない。辜に対する評価の変遷や、なぜ『台日』が台湾統治 40 年というタイミングでこうした企画を実施したのか、これらの背景の検証・分析は今後の研究に接続される課題である。

付記

本稿の修正にあたり、本誌レフェリーから貴重なコメントを頂戴した。記して深く感謝申し上げる。

注

1　台湾土着五大資産家として板橋林家（林熊徴）、鹿港辜家（辜顕栄）、高雄陳家（陳中和）、基隆顔家（顔雲年）、霧峰林家（林献堂）を挙げている。（凃照彦『日本帝国主義化の台湾』東京大学出版会、1975 年、398-399 頁）。

2　辜研究における主な基礎史料として、『台湾新報』、辜顕栄翁伝編纂会編『辜顕栄翁伝』台湾日日新報社、1939 年、大園市蔵『怪魔辜顕栄』台湾事蹟研究会、1923 年。
関連論文としては、日本語論文として、何義麟「台湾人の歴史意識—「御用紳士」辜顕栄と「抗日英雄」廖添丁」『アジア遊学』（48）勉誠出版、2003 年、野口真広「台湾人から見た台湾総督府—辜顕栄 , 林献堂 , 張麗俊を例として」『ソシオサイエンス』（13）早稲田大学大学院社会科学研究、2007 年など。
中国語論文として、呉文星「辜顕栄與鹿港辜家之崛起」『国史研究通訊』（2）、2012 年、王学新「從辜顕栄與送迎總督活動談本島人士紳在官方儀式中的角色」『台湾文献』第 62 巻 4 期、2011 年、何彩滿「辜顕栄的多重身份認同」『二十一世紀』第 112 期、2009 年、張宏謨「早期台湾傑出糖界名人—板橋林家、陳中和、辜顕栄、王雪農」『台湾風物』第 42 巻 4 期、1992 年、黄榮洛「辜顕栄和丘逢甲」『三台雑誌』第 16 期、1988 年、胡汝森「從辜顕栄談漢奸」『中華雑誌』第 14 巻 8 期、1976 年、許智訳「日人筆下的漢奸之祖—辜顕栄」『中華雑誌』第 13 巻 7 期、1975 年など。

3　辜顕栄翁伝編纂会編『辜顕栄翁伝』台湾日日新報社、1939 年、ゆまに書房、2008 年、596 頁。

4　「李春生及辜顕栄叙勲ニ関スル件」『明治二十八年台湾総督府公文類纂』（乙種永久保存第二巻官規官職）00000013008、2023 年 7 月 27 日最終閲覧。

5　「辜顕栄の拘引」『台湾新報』、1898 年、2 月 1 日付、4 頁。

6　凃照彦、前掲書、404 頁。

7　辜顕栄翁伝編纂会編、前掲書、591-595 頁。

8　許智訳、前掲論文、42-45 頁。
胡汝森、前掲論文、55-59 頁。
何義麟、前掲論文、46-53 頁。

9　この連載は、台湾新報にて 1898 年 2 月 2 日付～ 3 月 10 日付の間に北強生によって投稿された連載記事である。

辜の性行について鹿港時代～領台以後に拘留され釈放されるまでを31回に渡って詳細に記述している。この背景には台中県知事村上義雄との確執が考えられる。乃木、曽根体制から児玉、後藤体制へ変わる時期を鑑みると、辜の信用失墜を狙って特集された可能性もあるが、詳細は別稿で検証したい。（「辜顕栄の性行閲歴」『台湾新報』、1898年、2月2日付-3月10日付）。

10　同書は大園市蔵という「台湾の実業社」の主幹兼発行人が著者である。記述内容は『台湾新報』に掲載された「辜顕栄の性行閲歴」とほぼ同じであり、同記事を下敷きに書かれたと推測できる。そのため本稿では取り上げない。（大園市蔵、前掲書）。

11　このなかでも辜顕栄に関して触れているが、内容は『怪魔辜顕栄』からの一部再録であるため、本稿では取り上げない。（大園市蔵『台湾裏面史』日本植民地批判社、1936年、成文出版社、1999年）。

12　『明治二十八年台湾總督府公文類纂』（乙種永久保存第二巻官規官職叙勲）の中に収録されている史料。1895年12月に辜の叙勲申請の際に作成された文書一式で、叙勲申請理由のなかに辜の履歴が書かれている。経歴豊富な李とは対照的に、辜は清朝期の商業履歴が簡明に記載されている。この史料でのみ触れられている内容が多いが、勲五等以降の叙勲申請資料には記載されていない。（「李春生及辜顕栄叙勲ニ関スル件」『明治二十八年台湾総督府公文類纂』（乙種永久保存第二巻官規官職）00000013008、2023年7月27日最終閲覧）。

13　辜顕栄翁伝編纂会編、前掲書、10-11頁。

14　連載第1回目から11回目まではタイトルが「辜顕栄か性行閲歴」となっている。（「辜顕栄か性行閲歴」(1)『台湾新報』1898年2月2日付3頁）。

15　辜顕栄翁伝編纂会編、前掲書、11頁。

16　台湾総督府編『台湾列紳伝』台湾総督府、1916年、26頁。

17　辜顕栄翁伝編纂会編、前掲書、449-550頁。

18　井出季和太『興味の台湾史話』萬報社、1935年、林本源中華文化教育基金会、1997年、84頁。

19　この史料は伊能嘉矩が収集した台湾関係資料群のうち、その一部を台湾総督府東京出張所が伊能の遺族から購入し、台北帝国大学開校に合わせて揃えた「伊能文庫」に残されていたもの。全4冊で構成されており、頁、奥付は未記載。1929年3月6日に台北帝国大学図書館に寄贈された。ここでは第2巻に収録されている「台北ノ商人辜顕栄ノ口述」を参照した。
（伊能嘉矩「台湾ノ商人辜顕栄ノ口述」「台湾領有に関スル資料」、1929年、3月、台北帝国大学図書館蔵国立台湾大学図書館2000年複写本）。

20　台北ノ商人辜顕栄ノ口述
六月四日基隆陥落シ総督ノ一行上陸スルヤ翌日台北ノ商人辜顕栄トイフモノ来リテ台北ノ状ヲ具申ス其ノ要領左ノ如シ
本人ハ艋舺ノ雑貨商ニシテ屋号ヲ瑞昌成ト称シ姓名ハ辜顕栄トイヒ元彰化県鹿港ノモノナリ
一台北駐在ノ巡撫ハ清暦十二日（我四日）夜半逃走シ同時ニ巡撫衙門火ヲ失シセリ
一沿道（基隆ヨリ台北ニ至ル）兵勇ナシ
一台北府ノ良民土匪ノ為ニ金銀貨物ヲ略奪セラル故ニ総督閣下兵ヲ率ヒテ良民ノ塗炭ニ陥ルヲ救ハンコトヲ願フ生民等各街ニ白旗ヲ樹テゝ閣下ノ入台ヲ待ツ
一匪徒ハ新竹及彰化地方ノ者多シ故ニ閣下入台静カニ鎮撫セラルレバ皆良民ニ帰スベシ
一匪徒ノ頭領ハ邱逢甲トイヒ元来読書人ナリ
一鉄道ハ損壊スル所ナク機関車ハ台北ニ在リ
一電線モ損壊スル所ナシ但電報局ノ機械ノ損否ニ至リテハ知ラズ
一台北府ヨリ基隆ニ至ル河流ノ橋梁ハ損壊スル所ナシ
一同道路ハ鉄道ニ沿フタル小路ナリ然レトモ鉄道ヲ利用スレバ馬及車ヲ通スベシ
一本地ヨリ台北ニ至ル五十五清里ナリ
一本地ヨリ金包里ヲ経テ台北府ニ至ル道路ハ三貂大嶺ニ通ズル路ニ比スレバ高低少シト雖モ道路ハ一層小径ニシテ最モ困難ナリ馬車ハ固ヨリ通ズベカラズ
一本地ヨリ台北府ニ至ル河流ハ西球嶺ノ麓ニ於テ港仔内トイフ所ヨリ小船ヲ通ジ錫口ヲ経テ台北府ニ通スベシ
一本人ガ台北府ヨリ本地ニ至ル時間ハ午前八時ニ発シ徒歩シテ午後四時ニ到着セリ
一途中八堵ニ於テ日本兵凡百人許ヲ目撃セリ
一台北府大稲埕ニ英独ノ兵二十余人アリ外国ノ商人モ十数人アリ
一滬尾ノ現状ハ予之ヲ知ラズ
（伊能嘉矩、前掲書、第2巻）。

21　胡汝森、前掲論文、58 頁。
22　許世楷『日本統治下の台湾—抵抗と弾圧—』東京大学出版会、1972 年、48 頁、若林正丈『台湾抗日運動史研究』増補版、研文出版、2001 年、176 頁、伊藤潔『台湾 四百年の歴史と展望』中央公論新社、1993 年、73 頁。
23　台湾総督府陸軍幕僚編 / 川口喜三男校注「台湾総督府陸軍幕僚歴史草案」台湾総督府陸軍幕僚、1906 年、川口喜三男、1999 年。
24　伊能嘉矩、前掲史料。
台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌』(2) 台湾総督府 1939 年 南天書局 1995 年。
25　Davidson, James Wheeler　*The Island of Formosa, Past and Present: History, People,Resources, and Commercial Prospect,* London and New York: Macmillan & Co. ; Yokohama, Shanghai, Hongkong, and Singapore : Kelly & Walsh, Ld., 1903
26　台湾総督府陸軍幕僚編、前掲書、32 頁。
27　ここでは第 4 巻に収録されている「台湾渡航日誌」を参照した。（伊能嘉矩、前掲史料）。
28　記事原文では冒頭の日付が 5 月 28 日とある。しかし近衛師団の台湾上陸が 5 月 29 日のため、この時点ではまだ「台湾民主国」は崩壊しておらず、前夜（27 日）に台北で土匪の蜂起と市民の恐慌が起こるとは考えにくい。（「始政記念四十年間の台湾」(1)『台湾日日新報』、1935 年、6 月 1 日付、7 頁）。
29　なお『辜顕栄翁伝』での抄録では冒頭の日付が6月5日に修正されている。（辜顕栄翁伝編纂会編、前掲書、14 頁）。
30　Davidson, James Wheeler *The Island of Formosa, Past and Present: History, People,Resources, and Commercial Prospect,* London and New York: Macmillan & Co. ; Yokohama, Shanghai, Hongkong, and Singapore : Kelly & Walsh, Ld., 1903.pp299-305
※要約抜粋
31　台湾総督府陸軍幕僚編、前掲書、32 頁。
32　松本正純『台湾征討史』松本正純、1896 年、台湾懇話会、1935 年、27 頁。
33　Davidson, James Wheeler, *op. cit,* p299
台湾総督府陸軍幕僚編、前掲書、33 頁。
34　明治 28 年 6 月 5 日に辜が持参した嘆願書には台北を午前 8 時に出発し、午後 4 時に基隆へ到着したと明記されている。（伊能嘉矩、前掲史料）。
35　中京大学社会科学研究所台湾史料研究会『日本領有初期の台湾—台湾総督府文書が語る原像—』創泉堂出版、2005 年、20 頁。
36　台湾総督府警務局編『台湾総督府警察沿革誌』(2) 台湾総督府、1939 年、南天書局、1995 年、156 頁。
37　陳滄浪、張夢星、陳登元、潘成清、曽玉麟の 5 名が記載されていない。（「保良局設置認可、保良局章程認可、保良局存続」『明治二十八年台湾総督府公文類纂』（乙種永久保存第三巻官規官職）00000014032、2023 年 7 月 27 日最終閲覧）。
38　「北白川宮（71）本島民の請願」『台湾経世新報』、1934 年、5 月 6 日付、7 頁。
39　陳俊宏『禮密臣細説台湾民主国』台北、南天書局、2003 年、5 頁。
40　陳俊宏「李春生與禮密臣的一段軼事」『台北文献』第 122 期、台北市立文献館、1997 年、41 頁。
41　『台湾経世新報』、前掲紙。
42　「先導」にも「先に立って導くこと」という意味が用いられるが、後述するダビットソンと辜の叙勲裁可書は前者を「嚮導」とし、後者を「先導」と使い分けて表現している。もし、両者の役割が同じであれば、言葉を使い分ける必要は無い。辜については、新竹以南の南進軍への従軍において始めて「嚮導」という表現が使われている。また、近衛師団戦闘詳報ではダビットソンの存在は確認できるが、辜の存在は一切触れられていない。この扱いの違いは、言葉上の差を裏付けていると考える。（新村出『広辞苑』第 7 版岩波書店、2021 年、769 頁）。
43　佐野雄三郎は佐野友三郎（台湾総督府民政局事務官）、小川甚五郎は小川辰五郎（台湾総督府法院通訳）の誤りと思われる。
44　小川辰五郎は 1896 年 5 月からは台中県通訳生、1902 年 1 月台湾土地調査局などを経て、1921 年 11 月に「依願免本官」となっている。辜口述では小川甚五郎と名指しされているが、辰五郎の間違いと思われる。（「恩給證書下付（小川辰五郎）」『大正十一年台湾総督府公文類纂』（永久保存第二巻秘書）0000326501、2023 年 7 月 27 日最終閲覧）。
45　内藤菱崖編『台湾四十年回顧』精秀社、1936 年、成文出版社、2010 年、57-58 頁。
46　同上書 57 頁。
47　台湾日日新報「始政記念四十年間の臺灣 東京における本社主催座談会」(2)『台湾日日新報』、1935 年、7 月 1 日付、

7 頁。

48 『在台湾米国紐育ヘラルド新聞戦事通報員ゼームス、ダブリュ、デビソン外一名叙勲ノ件』アジア歴史資料センター Ref.A10112453000、2023 年、7 月 28 日最終閲覧。

49 『台湾住李春生辜顕栄叙勲ノ件』アジア歴史資料センター Ref.A10112453700、2023 年 7 月 28 日、最終閲覧。

50 辜顕栄翁伝編纂会、前掲書、112 頁。

51 胡汝森、前掲論文。

52 「童話の小父さん」『台湾日日新報』、1928 年、6 月 14 日付、7 頁。

53 「二十年前の軍曹殿と新兵さん」『台湾日日新報』、1915 年、6 月 17 日付、63 頁。

54 『自明治 28 年 5 月 29 日至同年 6 月 9 日台湾北部における近衛師団戦闘詳報』アジア歴史資料センター Ref. C06062147500、186 頁、2023 年 7 月 27 日最終閲覧。

55 「コノ日七堵ニ電信通信所ヲ開クニ方リ基隆通信所ハ当初誤テ他ノ電線ヲ器械ニ接続ス之カ為図ラス在台北清国電報局員ト通話スルヲ得・・・・・・『貴所ハ誰ナルヤ』ト然ルニ彼答ヘテ『台北府ナリ』ト尋テ左ノ如キ問答ヲ為セリ　問『貴所ハ基隆ヲ距ル幾許ナルヤ』答『鉄道線路ニ傍フテ約二十里アリ』問『足下ヲ名ハ如何』答『電信事務員ハンセンナリ今ヤ支那兵コトゴトク遁走シテ貴軍ニ抗セントスル者ナシ故ニ速ニ來ラルヘシト足下ハ足下ノ司令官ニ告ケヨ」（台湾総督府陸軍幕僚編、前掲書、33 頁）。

56 「李春生及辜顕栄叙勲ニ関スル件」『明治二十八年臺灣總督府公文類纂』（乙種永久保存第二巻官規官職）00000013008、2023 年 7 月 27 日最終閲覧。

57 同上史料。

58 辜顕栄翁伝編纂会編、前掲書、28 頁。

（2022 年 10 月 14 日投稿受理、2023 年 7 月 20 日採用決定）